

日時	平成27年*月*日(*) 第*時限		普通科	1年*組	1年*組教室
指導者	市毛 孝史	教科書	高等学校 国語総合	発行所	数研出版
教材	評論(二)「攻撃」と「共存」 山際 寿一 『ちくま評論入門』 岩間 輝生 他 『おとなの教養 - 私たちはどこから来て、どこへ行くのか?』 池上 彰				
単元目標	○論理の展開を根拠とし、文章の構成や内容を理解しようとしている。 (関心・意欲・態度) ○論理の展開を根拠とし、文章の構成や内容を理解することができる。 (読む能力) ○接続詞の意味・用法を適切に理解している。 (知識・理解) ([伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項] のイの(イ))				
単元の評価規準	関心・意欲・態度	読む能力		知識・理解	
	○論理の展開を根拠とし、文章の構成や展開を理解しようとしている。	○論理の展開を根拠とし、文章の構成や展開を理解している。		○接続詞の意味・用法を適切に理解している。	
指導と評価の計画 (全5時間)					
時間	各時間の目標	主な学習活動		各時間の具体的な評価規準及び指導の手立て	
1	1 キーセンテンスの性質や定義を理解する。	1 ランダムに並んだ形式段落を論理的に適切に並べ替える小テスト(資料①)に取り組む。		<b>評価</b> ○文章の構成や展開を理解しようとしている。 (関心・意欲・態度) <b>評価方法：ワークシートの確認</b> <b>【指導の手立て】</b>	
	2 キーセンテンスに適切に傍線を引く。	2 ワークシート(資料②)を用いて、形式段落ごとのキーセンテンスに傍線を引く。		1 小テストでは論理の展開を意識し、形式段落の内容を吟味して並べ替えるよう指示する。 2 キーセンテンスの性質や定義について以下の二点について理解させる。 ・形式段落ごとの結論(筆者の最も述べたいこと)であること。 ・1文か2文で表され、2文の場合は連続した2文でない場合もあること。	
2	1 傍線部がキーセンテンスであることの根拠を明確に説明する。	1 前回の授業で傍線を引いたキーセンテンスについて、グループ活動を通じて生徒同士でキーセンテンスを確認し合う。 ※形式段落5まで行う。 2 指導者の説明により、キーセンテンスを確認する。		<b>評価</b> ○文章の構成や展開を理解している。 (読む能力) <b>評価方法：ワークシートの確認</b> <b>【指導の手立て】</b>	
				1 単なるワークシートの見せ合いにならないよう、お互いに傍線を引いた根拠を説明し合うよう指示する。 2 正解・不正解にこだわらず、傍線部をキーセンテンスとした根拠の説明に重点を置くよう指示する。 3 文と文の論理的な関係によってキーセンテンスが決まることを理解させる。	

3	※第2時と同内容で形式段落6から形式段落10まで行う。		
<p style="text-align: center;">本 時</p>	<p>1 文章の構造について理解する。</p> <p>2 接続詞の意味・用法について理解する。</p> <p>3 文と文の論理的な関係を理解する。</p>	<p>1 接続詞小テスト(資料③)に取り組み、様々な接続詞の意味と働きを理解する。</p> <p>2 ワークシート(資料④)で「論理」について理解する。</p> <p>3 ワークシートの空欄に接続詞を補い、文と文の論理的な関係を理解する。</p> <p>4 グループ学習で、その接続詞を用いた根拠を互いに説明し合う。</p>	<p><b>評価</b></p> <p>○接続詞の意味・用法を適切に理解してる。 (知識・理解)</p> <p>○論理の展開を根拠とし、文章の構成や展開を理解している。 (読む能力)</p> <p><b>評価方法：ワークシートの確認</b></p> <p><b>【指導の手立て】</b></p> <p>1 今回の学習の意義(論理的な読解力の向上を目指す学習であること)をよく理解させる。</p> <p>2 文の内容を吟味し、そこから論理的な関係を考えるように指示する。</p>
時間	各時間の目標	主な学習活動	各時間の具体的な評価規準及び指導の手立て
5	<p>1 キーセンテンス同士のつながりから形式段落同士の論理的な関係を理解する。</p> <p>2 意味段落の論理的な位置付けを理解する。</p>	<p>1 ワークシート(資料⑤)に従い、キーセンテンスを適切な接続詞でつなぐことで、形式段落同士の論理的な関係を理解する。</p> <p>2 意味段落の論理的な位置付けを考える。</p> <p>3 グループ活動で、補った接続詞と意味段落の論理的な位置付けの根拠を互いに説明し合う。</p> <p>4 それぞれの意味段落の論理的な位置付けを教員の指示のもと確認する。</p> <p>5 ランダムに並んだ形式段落を論理的に適切に並べ替える小テスト(資料⑥)に取り組む。</p>	<p><b>評価</b></p> <p>○文章の構成や展開を理解している。 (読む能力)</p> <p>○接続詞の意味・用法を適切に理解している。 (知識・理解)</p> <p><b>評価方法：ワークシートの確認</b></p> <p><b>【指導の手立て】</b></p> <p>1 キーセンテンス同士に接続詞を補うことで形式段落同士の論理的なつながりを理解させる。</p> <p>2 意味段落の論理的な位置付けを理解させるため、文章の構成要素として「テーマの提示」「事実」「考察」「結論」の四つを挙げ、それぞれの意味段落がどの構成要素となるか考えさせ、文章全体の論理構成を考えさせる。</p>

本 時 案 (全5時間中の第4時) ※授業時間55分							
本時の目標	○接続詞の意味・用法を適切に理解してる。(知識・理解) ○文章の構成や展開を理解することができる。(読む能力)						
資料	接続詞小テスト, ワークシート						
	学習内容	学習活動	時 間	指導上の留意点及び評価の実際			
展 開	導 入	接続詞小テスト ・ 接続詞小テストに取り組む。 (資料③) ・ 様々な接続詞の意味を理解する。	10分	・ 接続詞によって論理性が示されることを理解させる。			
	展 開	接続詞を補い, 文と文の論理的なつながりを考えよう					
		現代文プリント2「文の論理的構造を理解しよう」(資料④)を用いて, 文と文の論理的なつながりを考える ・ 「論理」という語句の意味について理解する。 ・ 接続詞によって論理性が示されることを理解する。 ・ 接続詞がない箇所に接続詞を補い, 文と文の論理的なつながりを考える。 ・ グループ学習を通し, グループ内で補った接続詞を確認し, もっとも違いの多かった箇所について, どの接続詞を補うのがよいのか議論する。	35分	<table border="1" style="width: 100%;"><tr><td style="text-align: center;">評価</td></tr><tr><td>○接続詞の意味・用法を適切に理解している。 (知識・理解)</td></tr><tr><td>○文章の構成や展開を理解している。 (読む能力)</td></tr><tr><td style="text-align: center;">評価方法: ワークシートの確認</td></tr></table> ○「論理」の意味を辞書から引用する。 ○論理性が明らかな場合は接続詞が省略され, その論理的なつながりを読み手自身が補うことを説明する。	評価	○接続詞の意味・用法を適切に理解している。 (知識・理解)	○文章の構成や展開を理解している。 (読む能力)
評価							
○接続詞の意味・用法を適切に理解している。 (知識・理解)							
○文章の構成や展開を理解している。 (読む能力)							
評価方法: ワークシートの確認							
ま と め	本時のまとめ 次時の学習内容の確認	・ 指導者の説明の元, 補う接続詞を確認する。	10分	○文と文の間にある論理的なつながりは内容によって決まることを理解させる。			

一、次のA～Gを冒頭部分に続けて、論理的に適切な順序に並び変えなさい。

## 【冒頭】

ダーウィンの進化論を裏づける興味深い事例と実験があります。

イギリスには、オオモシフリエダシヤクという蛾がいます。この蛾は、黒と白の霜降り模様の羽を持つタイプと、真っ黒い突然変異体の二つのタイプがあります。

(A) ロンドンでは、大気汚染で環境が変わってしまったため、霜降りタイプの蛾は環境に適応できずに数を減らし、たまたま突然変異をした真っ黒のタイプの蛾がその環境を生き延びることができました。逆に言えば、大気汚染が解消されて空気がきれいになると、その黒い蛾は生き延びることができなくなる。これが進化というものです。

(B) この二つのタイプの蛾のうち、ロンドンでは真っ黒なタイプの蛾が大変増えていきました。これはなぜでしょうか。

(C) 結果は劇的なものでした。木が黒くなっている場所では霜降りタイプは野鳥に見つかりやすく、野鳥に食べられてしまいました。逆に空気がきれい森の中では、真っ黒のタイプの蛾が食べられてしまったのです。

(D) これは実際の実験によっても確かめられました。研究者は、二種類の蛾を、煤のために木が黒くなっている森と、空気がきれいな郊外に放ちました。

(E) 私たちは、進化とは正しく優れた方向に向かっていていると思いがちですが、自然界は決してそういうものではないことが、この例からもおわかりいただけると思います。

(F) 普通の樫の木に止まると、霜降りタイプは目立たなくなりす。一方、大気汚染が進み黒く汚れた木の幹では、真っ黒のタイプが目立ちません。かつてのロンドンは大気汚染が進んで木が黒くなってしまっていました。「霧のロンドン」というとロマンチックに聞こえますが、これは実は大気汚染で視界が悪かったということです。

(G) 木が黒くなれば、黒い蛾のほうが目立たないぶん、野鳥などに食べられなくてすみす。つまり黒が保護色になるわけですね。そのためにロンドンでは、真っ黒の蛾のほうが増えていったのです。

「おとなの教養」池上 彰（NHK出版新書）『突然変異とはどういうことか』

## 解答欄

〔 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕〔 ↓ 〕

## ◎形式段落のキーセンテンスをつかもう！

評論や小論文を書く際の約束事の一つに「一つの段落での意見は一つ」というものがあります。一つの段落にたくさん主張を詰め込んでしまうと焦点がぼやけ、読者の理解を妨げることになるからです。そして、段落ごとの意見は一文から二文で表されるケースが多く見られます。(二文の場合は、離れて出てくるケースもあるため、注意が必要です。) 今回の単元ではそれら各段落の意見を「キーセンテンス」と定義し読解を進めていきます。

## ◎キーセンテンスを理解するメリット

- ・狙いをもって文章を読むことができるので、内容を理解しやすくなる。
- ・キーセンテンスの論理的なつながりを理解することで、文章全体の論理的構成が理解しやすくなる。

小論文を書く際に、論理の構成を意識して書くことができるようになる。

一、各段落のキーセンテンスに傍線を引き、後の解答欄に書き出そう。

## 『攻撃』と『共存』

山極 寿一

①かつて、戦争は人間の本能の所産と考えられた時代があった。劇作家のロバート・アードレイは六二年に『アフリカ創世記』を著し、道具を製作する能力を身につけた人間が、動物に由来する攻撃本能を用いて、巨大な殺戮機械を発明する歴史を描いた。これは、南アフリカで発見された猿人たちが武器で仲間を殺す習慣をもっていたとする、人類学者レイモンド・ダートの発見に基づいていた。

②翌年、動物行動学の父コンラート・ローレンツは『攻撃―悪の自然誌』を書いて、人間に本来備わっていたはずの、殺戮能力と本能的な抑制能力とのバランスを、武器の発明が失わせたことを指摘した。二つの世界大戦を経験した当時の人々は、戦争が人間の進化にともなう不可避の現象であり、人間にとって最も効果的な調停の手段だと見なしたがつっていた。

③しかし、その後の調査で猿人の傷は武器ではなく石に圧迫されてきたものだとなかった。猿人の後に登場した原人にも武器を用いて仲間を殺傷した証拠は見つかっていない。五百万年に及ぶ人類の進化史のなかで、戦争を是として暮らしたのはほんの最近の数万年か、数千年のことのようだ。また、その後人間に近いサルや類人猿の野外研究が進むと、動物における攻撃行動も負ではなく正の意味があることが明らかになった。

④個々のサルたちにとって攻撃とは自己主張をする手段である。弱すぎれば相手に無視されてしまうし、強すぎれば相手の反感を買う。相手と状況によってそれをうまく駆使することにより、相手の抑制を引き出すことも、味方を得ることもできる。つまり、攻撃とは互いの関係を認知し、双方の主張に沿って行動を変えるための共存の手段なのである。

⑤ゴリラやチンパンジーなどの類人猿になると、けんかの際に第三者による仲裁がよく見られる。しかも、一見して力の弱そうなメスや子供が、屈強なオス同士のけんかに割って入ることがある。これは、オス同士の闘争が自分たちの共存に大きな危機をもたらすことをメスや子供たちが知っていて、オス同士も仲裁によって引き分けるといふ結果を望んでいるからである。弱者の仲裁は、互いに張り合うオスたちが面子を失わずに共存する絶好の機会を与えてくれるのだ。

⑥長い間、威嚇と攻撃の象徴のように見なされてきたゴリラの胸たたき(ドラミング)も、実は特定の相手に向けられるものではなく、闘わずに自分を主張する平和な行動であることがわかってきた。胸をたたくのは、相手に自分の殺意を伝えているのではなく、集団の長としてその状況に大いなる不満の意を表明し、相手の抑制を引き出そうとしているのである。集団同士のあいでは、オスが交互に胸をたたき合った後、なるべく対等の別れを演出しようとする。力の権化のようなゴリラのオスたちも、実はむやみに闘いたくはないのだ。

⑦現代の戦争は、われわれの祖先がサルや類人猿から受け継いだ「仲間と共存するために必要な攻撃性」とは質が異なるように見える。戦争に不可欠な「相手を抹殺するための攻撃性」は、相手との関係や相手の性格を変更不能なものに決めつけ、自然界には存在しない頑固で醜悪な敵を仮定したときに生まれてくる。それは、人間が進化の過程で必然的に得た能力ではない。相手を失ってしまったら、そもそも共存のために攻撃する意味が失われてしまうからだ。

⑧数年前、コンゴ動乱を体験したアフリカの友人は戦争が最近大きく変質したと顔をゆがめて語った。昔の戦争は男だけの行為だった。前線が通過し、敵に村が占領されても女子供は無事でいられた。しかし、今の戦争は相手を選ばない。事実、世界各地で起こっている民族紛争で、犠牲者の多くは子供である。その悲惨な事態を世界の大国は止めるどころか、武力を使って煽るばかりだ。人々をテロへと駆り立てる心理が増幅しつつある。今や人間は、かつてない不気味な精神世界をつくろうとしている。

⑨最近、人々の口からテロを抑制するために暴力を是認する声が聞かれるようになった。半世紀前と同じように、再び人々はそれが人間の本来の性質だと思いがついているように見える。しかし、生物学者は安易にその風潮を支持するような意見を言うべきではない、と私は思う。相手を抹殺することによって自分を守れるという誤った考え、そのための武器や威嚇が調停の手段になるという幻想は捨てるべきだ。

⑩われわれの祖先が社会をつくるために発達させてきた攻撃性は、弱者が強者の対立に終止符を打ち、勝敗を決せず共存する方法を教えてくれるはずである。弱者が自分の権益を守ろうと味方につく強い相手を選んでいては、その実現は難しい。それは戦争を肯定し、勝者をつくり出そうとする行為にほかならないからだ。抹殺せねばならない人間など、この世に存在するわけがない。今こそ、人間は類人猿の社会を見習い、真摯な目で過去に通ってきた精神世界を見つめ直す時なのかもしれない。

一、次の①～⑫に当てはまる接続詞を、語群から選んで書け。

**語群** むしろ・だが・ところで・あるいは・まして・そこで・なお・では・確かに・いずれにしても  
もともと・つまり・ゆえに・それに対して

☆**転換** 新しい話題を持ち出して、今までの話題を変える。

さて・① ( ) ・② ( ) ・話は変わるが

☆**逆接** 前の内容を打ち消したり、反対の内容を述べる。

しかし・けれども・ところが・③ ( ) ・しかるに・とはいうものの・しかしながら・

☆**対比** 前後の二つの言葉や文を対比させて、違いを際立たせる。

⑤ ( ) ・～と比べて・Aは～、一方Bは～・それとも・あるいは～か

☆**追加** 前の内容に情報を付け加える。

また・そして・それに・⑥ ( ) ・～も・ともに・と同時に・さらに・そのうえ・しかも・のみならず  
それに加えて・⑦ ( ) ・もうひとつ・とすると

☆**順接** 前の内容を前提・原因として受けて、結論・結果を述べる。

したがって・だから・⑧ ( ) ・それゆえ・～すれば・すると・⑨ ( ) ・結局

☆**補足** 前で言い足りなかったことを補う。

なぜなら・～から・～というのは・ただし・⑩ ( ) ・もちろん・むしろ・⑪ ( ) ( )

☆**換言** 前の内容を要約したり、別の言葉で言い換える。

⑫ ( ) ・すなわち・要するに・たとえば・言い換えれば・いわば・というよりも

⑬ ( ) ・⑭ ( ) ( )

## ◎文の論理的構造を理解しよう

## 一、論理とは

- （議論、推論、などを進める際の）思考の筋道。（ベネッセ国語辞典）  
 ○思考の形式・法則。また、思考の法則的なつながり（広辞苑第六版）

論理とは

と定義できる。

## 二、評論における論理性

評論における論理性とは、「文と文や段落と段落のつながりが論理的であること」つまり、**文と文や段落と段落が矛盾なく整合性を持っていること**である。

## 三、論理を示す語句

言語表現において、論理性を示す代表的なものは「接続詞」である。接続詞の意味を理解することで、文と文また段落と段落の論理性を理解することができる。

しかし、論理性が明らかでない場合に**接続詞は省略されるので、読み手や聞き手自身が、その論理性を補いながら読む必要がある。**

← ← ←

**文と文の間に接続詞を補い、そこにある論理性を理解する力を身につけると、論理的な読解力が向上する**

四、次の文章の空欄に論理的に矛盾のないよう接続詞を補おう。（接続詞小テストを参考にすること）

## ☆この練習の狙い

**論理性を意識した読解を体感してもらうため、接続詞のない箇所にあえて接続詞を補い、文と文の間にある論理的なつながりを考える。**

## 問一

翌年、動物行動学の父コンラート・ローレンツは『攻撃―悪の自然誌』を書いて、人間に本来備わっていたはずの、殺戮能力と本能的な抑制能力とのバランスを、武器の発明が失わせたことを指摘した。① 二つの世界大戦を経験した当時の人々は、戦争が人間の進化にともなう不可避の現象であり、人間にとって最も効果的な調停の手段だと見なしたがっていた。

## 問二、

しかし、その後の調査で猿人の傷は武器ではなく石に圧迫されてきたものだとなった。② 猿人の後に登場した原人にも武器を用いて仲間を殺傷した証拠は見つかっていない。③ 五百万年に及ぶ人類の進化史のなかで、戦争を是として暮らしたのはほんの最近の数万年か、数千年のことのようだ。また、その後人間に近いサルや類人猿の野外研究が進むと、動物における攻撃行動も負ではなく正の意味があることが明らかになった。

## 問三、

個々のサルたちにとって攻撃とは自己主張をする手段である。④ 弱すぎれば相手に無視されてしまいうし、強すぎれば相手の反感を買う。⑤ 相手と状況によってそれをうまく駆使することにより、相手の抑制を引き出すことも、味方を得ることもできる。つまり、攻撃とは互いの関係を認知し、双方の主張に沿って行動を変えるための共存の手段なのである。

## 問四、

最近、人々の口からテロを抑止するために暴力を是認する声が聞かれるようになった。半世紀前と同じように、再び人々はそれが人間の本来の性質だと思っていたがっているように見える。しかし、生物学者は安易にその風潮を支持するような意見を言うべきではない、と私は思う。⑥ 相手を抹殺することによって自分を守れるという誤った考え、そのための武器や威嚇が調停の手段になるという幻想は捨てるべきだ。

## 問五、

われわれの祖先が社会をつくるために発達させてきた攻撃性は、弱者が強者の対立に終止符を打ち、勝敗を決せず共存する方法を教えてくれるはずである。弱者が自分の権益を守ろうと味方につく強い相手を選んでいては、その実現は難しい。⑦ 人間など、この世に存在するわけがない。⑧ 今こそ、人間は類人猿の社会を見習い、真摯な目で過去に通ってきた精神世界を見つめ直す時なのかもしれない。

◎各段落のキーセンテンスの間に適切な接続詞を補おう。

第一段落

論理的位置づけ

①戦争は人間の本能の所産と考えられた時代があった。



②二つの世界大戦を経験した当時の人々は、戦争が人間の進化にともなう不可避の現象であり、人間にとって最も効果的な調停の手段だと見なしたがっていた。



③その後人間に近いサルや類人猿の野外研究が進むと、動物における攻撃行動も負ではなく正の意味があることが明らかになった。

第二段落

論理的位置づけ

④攻撃とは互いの関係を認知し、双方の主張に沿って行動を変えるための共存の手段である。つまり、攻撃とは互いの関係を認知し、双方の主張に沿って行動を変えるための共存の手段なのである。



⑤（オス同士のけんかの際に見られるような、メスや子供による）弱者の仲裁は、互いに張り合うオスたちが面子を失わずに共存する絶好の機会を与えてくれる。



⑥長い間、威嚇と攻撃の象徴のように見なされてきたゴリラの胸たたき（ドラミング）も、実は特定の相手に向けられるのではなく、闘わずに自分を主張する平和な行動であることがわかってきた。

第三段落

論理的位置づけ

⑦現代の戦争は、われわれの祖先がサルや類人猿から受け継いだ「仲間と共存するために必要な攻撃性」とは質が異なるように見える。



⑧今の戦争は相手を選ばない。今や人間は、かつてない不気味な精神世界をつくろうとしているのだ。

第四段落

論理的位置づけ

⑨相手を抹殺することによって自分を守れるという誤った考え、そのための武器や威嚇が調停の手段になるという幻想は捨てるべきだ。



⑩われわれの祖先が社会をつくるために発達させてきた攻撃性は、弱者が強者の対立に終止符を打ち、勝敗を決せず共存する方法を教えてくれるはずである。今こそ、人間は類人猿の社会を見習い、真摯な目で過去に通ってきた精神世界を見つめ直すべきなのだ。



